



六

花

3

2022

りっかはいくかい

猫柳



山田六甲

白息を吸うて白息吐きにけり
梅一輪二階の雨戸閉めてあり
猫柳あとからあとから弟子育つ
残雪や銃と自由と貝合
第一大万大吉雪に足止め関ヶ原
五十鈴川の水を嘗めとる春の鹿
とりあへず半殺しなるきりたんぽ
耳元を朝寝の夢の出てゆきぬ
雛送りしてはいけないことをして

雛の間に囁く灯し漏れにけり
ワクチンを打たれて寒のもどりかな
太陽が島の表へ若布干す
雛の日は利家公のご命日
みちのくの音芳しく芹刻む
丹頂の脚のぐるりの水青し
青ぬたや角の取れたる酢をつかひ
にごろ鮎比良八講の日なりけり
野焼煤髭の氷柱に羅漢仏
鳥は背に羽根を背負へり祇王の忌
荒雲の降り来て残る寒さかな

しぐるるや岩を背負へる磨崖仏
笹村政子

磨崖仏が岩を背負っているというところでもないウソが動物に出来ない詩歌の言霊。
しぐるるやいわをせおえるまがいぶつ ささむらまさこ
(六甲)

大池の鴨の自在を見て帰る
善野 行

鴨は日本へ渡って来るとき見事な列を作って飛来した。一糸乱れぬというふうにあるが、池にたどり着くとあとは、帰って行く時まで、それぞれ思いのままに過ごす。作者自身はその自在さに憧れを抱いているのかもしれない。集団に添わないと生きていけないからであるが、日本の地にたどり着くと、あとは恋愛も自由で愛する人と、この地に残ろうと思えば残れる。それまでは自由を謳歌しているようにも見えらるる。常に何かに縛られている人は自在ということにあこがれる。いや自由でなく縛りの中に自在さを楽しめるようになりたいと思うのだろうか。
おおいけのかものじざいをみてかえる ぜんのごう
(六甲)

しぐるるや岩を背負へる磨崖仏
立枯れの枝からみ合ふ冬の鴟
正面に城を置きたる枯野かな
曲りては昏らむ廻廊鼯鼠
さざ波の影を幾重に浮寝鳥
川風の流れに曳かれ枯尾花
ひと畝の色を違へて冬菜畑
居着きても馴染まぬ猫や漱石忌
おもかげを余白にしるぶ古日記
母の忌の京へ集へる夕時雨

▽磨崖仏が岩を背負ふ？そんな馬鹿な！、というのを信じさせる。ウソをほんまに、ほんまをウソに仕掛けて楽しむのは人間だけ。この磨崖仏（磨崖仏）を見て言の葉の世界に遊んでみた。詩歌の歴史は古事記の世界からであるが、戦国時には戦いに駆り出された兵士（農民）も野や畑で休むとき、掛け合いで言葉を楽しんでいたという。福岡伸一博士によると人間の細胞は一年ですっかり入れ替わるのだという。だから今年の政子は去年の政子と違う人になったのだ。夢風撰。

▽冬の鴟の句。鴟が秋だと感じるのは、「秋晴に響きわたる高音に、深まる秋意を感じ取った」と山本健吉も書いている。ところで私は、鴟は渡り鳥だと思い込んでいた。ヤス子の話によると秋ばかりでなく一年中見かけるようで、どうも留鳥らしい。鴟の贄（にえ）などが目立つからであろうか。知らなんだ。

▽正面にの句。城の姿が全貌できるようになった。それによって四百年前の城の姿がもどつたのだ。目の前にある未枯れの景色を画いて枯野の姿を思い浮かべている。何も俳句は実景でないといけないのではない。目の前の景色を広大な景色として詠むはその人の想像力の豊かさによるものがあったてよい。

▽漱石忌の作品。猫の本質をよく知っている。猫は生きていくために、食餌をくれる人に付くが、心まではなつかないのである。猫の本質をよく知って、か、思い知らされたか、「吾輩は猫である」をもって漱石の忌日を偲んだのであろう。

▽おもかげをの句。身内（でなくてもよいが）の遺した日記であろう。何も記入されていない余白の理由などをあれこれ想像している。掲句の「余白」の意味は深い。その余白が何か読者には知る由もないけれど、過ぎ去った過去を日記の余白にしるびみるといふ深い余韻の漂う句。夢風撰候補。

木の葉髪 ◎ 志方 章子

銀杏を拾うて帰る夕餉どき
華やぎの少し十月桜かな
なるやうになるさと案山子言ひくるる
大根炊く一人といふも鍋一杯
落葉掃き寄せつつ母の蘇る
枯葉散る淋しくなんかあるものか
畦道に笑つてをりぬ捨て案山子
淋しさを何に例へむそぞろ寒
木の葉髪私の知らぬ私かな
匂はむか硝子越しなるシクラメン

▽木の葉髪の句。女性の髪には神が宿するような、女の情念、怨念のようなものが宿っているのか。もしかしたら女性の命綱か情念のアンテナかと思う。髪を撫でられた女性は心穏やかになったりイラついたりする。恋に破れたり大きな心境の変化があるときにはバツサリと切ったりする。恐怖映画の貞子なども髪の毛が顔を隠して恐怖を与えてくる。髪は女性の命という人もある。いろいろ調べてみたが髪の毛に関する論や書が少ない。髪には男女を問わず、遺髪などとするのに髪の毛などを誰かが書いてくればいいのにも思う。掲句は、その情念や怨念を感じさせる髪は私ではない、と恐れているかも知れない。夢風撰候補。

▽落葉を掃きよせていたら、ふと母親が蘇ってきた。普段は忘れていることも、何かをきっかけにふと蘇ることはある。掲句の場合は母と暮らしていた頃が蘇って、落葉を掃きよせることも忘れてしばし呆然としている時であろう。

▽シクラメンの作品。シクラメンの匂いがどのようなものか、この句を見て私は庭に出て咲き始めているシクラメンに鼻を近づけた。が香りはほとんど無かった。が、これは小椋佳の「シクラメンのかほり」という歌を作って流行ったが、契沖以降の「歴史的仮名遣」では「かをり」が正しいとされ、それ以前にスタンダードだった定家仮名遣いでは「かほり」が正しいとされている。掲句では硝子越しにシクラメンが匂うだろうかと詠んだのである。シクラメンの色が匂うがごとくであるからでもあるろう。

▽章子の作品は、少し短歌調で主観を表に出す作品が多いがそれも彼女の個性である。女性はあるいはこのように主観を表に出すのもいいかと思う。

柚子みそ ◎ 升田ヤス子

大根焚尻半分の椅子取りて
大根焚大鍋に渦生れて果つ
その足で参るお地藏日記買ふ
美男葛飾る古刹にむかへらる
茅葺の古き末寺や石落咲いて
岩噛んで冬寂ぶ谷の水の音
摩崖仏上ミにしあれば冬の川
丹の橋の神さびてゐて冬の川
青空に花と見紛ふ金鈴子
ちよびちよびと柚味噌を嘗めて夫の酒

▽大根焚の作品、冬場京都ほか各地の寺で振舞われる煮大根は、参拝客がほっとする温かいもてなし。私もたまたま兵庫県加西市の法華寺を訪問した時、法華寺の信者さんたちが煮大根を振舞っていて、私も家内といただいた。冷える山中では心の中で温まったものである。参拝客で賑わう時には掲句のように、まるで椅子取りゲームのような状態になるのだろう。が、句は参拝者の譲り合いのほほえましい光景で、決して奪い合いではないのである。そういうときお中は得意のお尻から攻め込むのがいかにも関西らしく栃木出身のヤス子もすっかり関西のおばちゃんになっているのである。夢風撰候補。

▽美男カズラは秋になると美しい赤い実を付けぶら下がるがもともと枝をつぶすか樹皮を剥いで水に浸しておくよねばねばした液が出てきて昔それを整髪に用いたのでピナンカズラ（美男葛）の名前があり正式な和名（標準和名）はサネカズラ（実葛）。美男といえばすぐに業平か源氏を連想する。掲句は鶴林寺（聖徳太子にゆかり）の美男カズラであろうか。女性にとつてはワクワクする古刹。

▽今月は寺院の句を中心に、挨拶句を詠んだ。岩を噛んで流れる水の句は動的で寒さを募らせるし若々しい掬え方である。

▽金鈴子の句。キンレイシは黄色で、形が小鈴に似ているところから名付けられた棟（せんだん）の果実。冬も極まる。と鳥たちも食べにくる。掲句は花のように成って、まさに鈴なりの状態。花に例えて詠んだ。

▽柚子みその句。ご主人は酒のつまみに柚子みそを舐めながら呑むのだそう。お酒が進むとヤス子は水で薄めて出すという。これがご主人を長生きしてもらおう良妻賢母の姿。

y

桜紅葉 ◎ 善野 行

廃線の噂絶えずよ櫨紅葉
親鴨の水脈の中ゆく子鴨かな
大池の鴨の自在を見て帰る
石路の花咲いて狭庭の一浄土
知るべみな遠くなりけり枇杷の花
蔦紅葉今は狐狸棲む長屋かな
一つ残る桜紅葉の青空に
冬の木の虚のぬくさやましら茸
朝の月うつすらとありあふちの実
金鈴子揺れて水子の霊鎮め

▽池の句。大池はこの池でもいいが、やがて後世の人たちは「加古大池」だと語り出すだろう。その近くに喫茶クレヨンというのがあって、打ち合わせなどには誠に都合がいい。その打ち合わせのついでに大池をみようと言っことになって、二人で見て帰った。その折の句であろう。俳人は見れば妙に納得するのである。その時は句が生まれなくても、しばらく頭の中で熟成する。やがてそれが句となって現れるのだ。その句が「鴨の自在」である。だれに縛られるでもなく鴨はのびのびと自在に泳いでいる。時間や生活にしばられることなく鴨が泳いでいる光景が印象深かったであろう。彼は一応社会から解放されたが、今も臨時講師として学校に勤めている。その責任を鴨が解き放つてくれるような気分であったにちがいない。

▽桜紅葉の句。桜紅葉の紅は美しい。その一枚だけ残ったその向うの青空を背景に際立って美しく見えたのだ。物の色は背景との配色によって印象強く美しい。ことに秋の青空には紅色が映える。その印象を詠んだ。ただし美しいなどとは言わず技巧を凝らさず、秋の名残も含めて淡々と詠んでいる。夢風撰候補。

▽浅月と榎の実との句。どちらも通い合うのは僂さである。淡い通い合いが明け方の光景としてまことにいい。

▽金鈴子が揺れて水子の魂を慰めるなども佳い。赤子は動くものに視線をやる。榎の実が淡く揺れてあやしているように思えたのであろう。榎の実は昔芭蕉ゆかりの大阪（浮瀬）吟行のとき、ある高校の校庭近く）に見事な榎の樹があった。その鈴生りの実が印象的だった。

▽蔦紅葉の句。長屋の光景であるが実景かどうかは知らない。しかし狐狸が棲むというのはいかにもという気がする。今も六花長屋には狐狸や貉が闊歩するので淋しくない。むしろ愉快な気がする。

茶筧がほど ◎ 住田千代子

茶筧がほど◎住田千代子

木守柿ぼつと灯りぬ禅の寺
薄切りの椎茸ちぢむ冬の晴
侘助や時をり鐘を誰が撞く
侘助の茶筧がほどの開きかな
燃え盛る美男葛を手のひらに
冬の蝶奥の院へと閑伽井橋
徒然の石仏に降るもみぢかな
豆柿の日差しの天に忘れらる
わたくしの髪へも霞降りにけり

▽木守柿の句。木守柿の意味は知っての通り、柿の実を全部取り切らず、一個だけ木に残しているもので、旅人や心のために残しておく実である。掲句のようにその意味を含めて詠んだので、木に残す志の温かさ、明るさをよんだもの。ましてや禅の寺であることも慈悲の明かりとなる。しかし近年は柿の実が採られず残りばなし。これでは木を守るどころか木を弱らせる柿になっている。誰も食べないから他家の玄関に夜中おいて逃げる人が続出。

▽侘助の句。侘助とはワビスケツバキで花は通常のツバキに比べて小輪で一重・猪口咲きのものが多いのが特徴。特に茶席に生けられる花。名前からして茶の侘び寂びにつじむからであろう。姿そのものも実に控え目なところが作者にも通うし、花蕊の形状はまさしく茶筧のごとくである。時折誰かが寺の鐘を撞いているのだろう。その抒情的な時の中に作者は心が温まる心地がする。寺の鐘は誰でも撞いてよいものかと思う。「誰か」「でもいい」「誰か」でもいい。

▽美男葛の紅い実が燃え盛る、と言った。美男の名前の由来は、蔓からとった粘液を男性が整髪料として使っていたことに由来している。先ほど神戸西区の国宝太山寺奥の院へ渡る橋から手が届きそうなところに自生してた。当日いち早く見つけたのは千代子である。赤い実が美男の燃える心の炎のように感じたのであろうか。

▽冬蝶が奥の院へ閑伽井橋を渡って行ったと言うのである閑伽というのはアクアとはフテン語で水のこと、何時の時代にインドまで渡った言葉か知らない。英語でもアクアマリンなど使う。瀬戸内海で赤瀬などという地名もアクア瀬から来た言葉だと昔赤瀬さんという人が言っていた。

▽徒然というのは調べてみると「することがなくて退屈なこと」と改めて知った。石仏は動かないからさぞ退屈であろう、というのか。徒然という漢字が美しいと思う。それは徒然草という言葉から来る印象がつよいのかも。石仏は常に衆生の幸せを願って身じろぎもせず修行している姿である。

▽豆柿の実はあまりにも小さいので木守柿にもならないよ、というのが根底にあるのか。「丹の橋の句も」時雨に華やぐ」が佳い。この柿は残してある柿ではなく忘れられた柿のような気がする。夢風撰候補。

▽蔽の句。「わたくしの髪」がいい。蔽に降られたころの弾みが出ている。佳句がこんこんと湧いてくる。